



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

ベクションとは何だ!?

妹尾武治

まさか「ベクション」のようなニッチなテーマで、まるまる一冊本を書く好機を与えられることになるとは全く予想だにできなかった事態であった。しかし編集の石井徹也さん、解説の鈴木宏昭先生に何度確認しても「ベクションだけで一冊書いて良い」とのこと。驚きを禁じ得ないまま、「もしかすると何かしらのドッキリ企画か?」という思いを消せないまま執筆に取り組んだ。ベクションに終始した、そんな本が売れるのか?

しかし、やるからには、驚くほど幅広くベクションについて完璧

に学べる本にしよう、そんな思いで取り組んだ。ニッチだと侮って読んでもらって全く構わない。読後には、必ず驚きが待ち構えているはずだ。「ニッチで些末な本どころか、知覚心理学の大事なこと、その本質がしっかり学べる本ではないか!」そんな声が聞こえてくるように、一生懸命執筆した。

ここではあえて「ベクション」とはなんであるかについては触れない。それは本書を読んでもらえば全てがわかるから。気になった方は、是非一冊お手元に置いて欲しい。



著 妹尾武治
発行 共立出版
B6判 / 126頁
定価 本体1,800円+税
発行年月 2017年5月

せのお たけはる
九州大学大学院芸術工学研究院准教授。専門は知覚心理学。著書はほかに『使ってはいけない工セ心理学 使ってもいい心理学』(PHP研究所)、『脳は、なぜあなたをだますのか: 知覚心理学入門』(筑摩書房)、『おどろきの心理学: 人生を成功に導く「無意識を整える」技術』(光文社)、『脳がシビれる心理学: ココロと脳はどこまでわかったか?』(実業之日本社)など。

自閉症と感覚過敏

特有な世界はなぜ生まれ、どう支援すべきか?

熊谷高幸

最近、自閉症の当事者による本が多く出版され、非常によく読まれている。そこで多く述べられているのが感覚過敏についてである。自閉症者の親や支援者と話しても、感覚過敏に関する話題は多い。私は、以前から、このテーマで共同研究を進めようと、専門家に声をかけてきた。しかし、「でも、どうやって?」と、ためらいの反応が多かった。

感覚過敏とは人の内部で起きていることだから、客観性を旨とする科学では扱いにくい。さらに、感覚といっても視覚、聴覚、触覚

など種類が多く、また、いつ、どこで、何に、どのような影響を受けたか、は各人各様である。だが、そうはいっても、当人には、現に大きな問題を引き起こしている。特有な感覚の中にいるため、他の人々と注意や行動を共有しにくく、また、感覚は記憶され、その後の行動に大きな影響を及ぼす。

本書では、多くの事例をもとに、感覚過敏が自閉症をどう生成するのか、モデル化してみた。心理学とは主観を客観視する学問である。その意味では、これは本命となる領域のひとつかもしれない。



著 熊谷高幸
発行 新曜社
四六判 / 208頁
定価 本体1,800円+税
発行年月 2017年1月

くまがい たかゆき
福井大学名誉教授。専門は自閉症者のコミュニケーション障害とその支援。著書はほかに『天才を生んだ孤独な少年期』『タテ書きはことばの景色をつくる』『日本語は映像的である』(いずれも新曜社)、『自閉症: 私とあなたが成り立つまで』『自閉症の謎 ころの謎』(いずれもミネルヴァ書房)、『自閉症からのメッセージ』(講談社現代新書)など。